琉球大学学術リポジトリ

機械の共同利用を進めるために

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 泉, 裕巳
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20656

機械の共同利用を進めるために

いうまでもないことだが、われわれは生れながらに、家族、親族という血縁グループの一員になり、同時に部落、村という地縁グループの一員になる。長じては、学校の同窓会や4Hクラブなど、いろいろな類縁で結ばれたグループにも入る。ところがトラクター共同利用という、新しい労働手段の機能を中心に結ばれるグループは血縁、地縁など自然発生的に結ばれるグループとは、性格が違う。それは、いわばトラクター縁で結びついた機能集団でその特色は、必ずしもこれまでの部落組織によりかかって成立していないことである。日本々土の例を見ても、共同化ですぐれた成績を示している集団は、ほとんど、部落関係にとらわれず、特定の目的－農業生産および販売－を通じて、共同の利害で共同の関係に入ったグループである。ある地方の例では、リンゴ共同防除組合とトラクター利用組合とはその構成員が一部ダブっていたり、また養豚組合や、シイタケ組合などがあり、各農家は必要に応じてそれぞれの組合に加入している。つまり経済的機能の種類ごとに組合がいくつもあり、各農家は、利害を共通にする範囲内で、いろいろの結びつきのグループを作っている。このような経済的合理性を貫こうとするグループの中で使われてこそ、トラクターの本来の性能が営農のなかに生かされるようになる。

広くいえば、農業共同化は、独占資本主義社会で自営農民が生き抜くための一つの対策であり、それにふさわしい条件をもたなければ成功はおぼつかない。だから、地縁関係によりかかって、自給を主とする下層農までもそっくり含んだ部落ぐるみの共同化は、田植えやわら屋根のふき替えのような原始的人力作業には向いていてもトラクターのような高度の労働手段を活用する商品化の展開には、むしろ制約になる。

〝金の切れ目が縁の切れ目〟というが、トラクター縁とは経済的機能による結びつきであり、端的には金の縁である。お互いに引き合う見通しがなくなればたちまち切れてしまう。ある意味では、ドライな冷たいつながりである。家族という血縁につながっていれば、気持もあたたまり、部落の地縁によりかかっている方がなんとなく安心できるかもしれない。しかし、そこから抜け出して、この冷たさを通り抜けない限り、農業生産の近代化もトラクター利用の合理化も期待できないのではなかろうか。

機械化計画をたてる順序

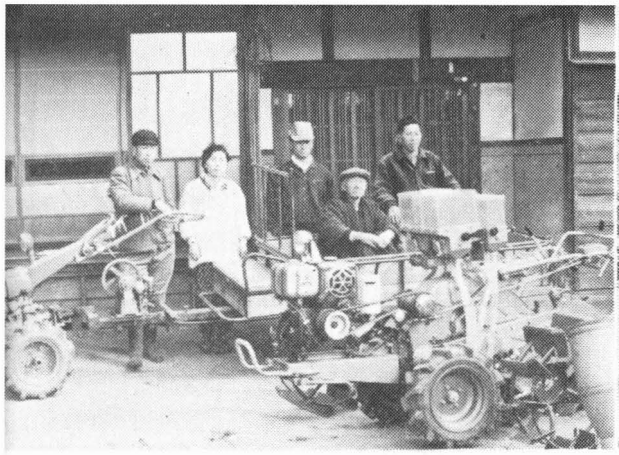
共同で機械化に取り組むグループ作りの見通しがつくと、すぐ次には機械の導入計画をたてるのがふつうである。しかし、気をつけたいことは、機械を選んで導入することは、機械化計画のなかの大事な部分であるには違いないが、あくまでも総合的な機械化計画の一部分にしか過ぎないということである。

機械化をうまく進めるには、既成服を買ってきてすぐ着るようなわけにはいかない。もちろん、今日では、たとえばトラクターなどは、その大部分が輸入機でしかも銘柄が限られている。だから、完全な別あつらえのお仕立て服とまではいかないにしても、少なくともイージーオーダーの服を作るぐらいの段取りと心構えは必要である。

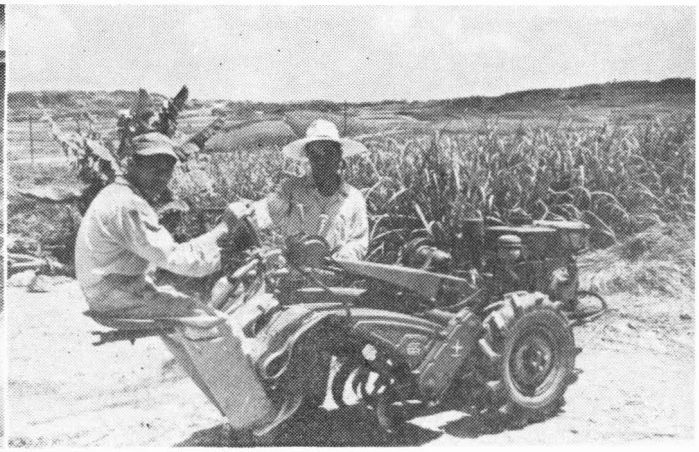
グループの構成内容や性格が違えば、機械化の形や内容も違うのが当たり前である。公式的に与えられる機械化の方法をそっくり受け入れたり、よそのやり方をうのみにしたりせず、それぞれのグループのなかにある当面の切実な問題を、将来の営農目標と照らし合わせながら解決するために機械の能力を活用するというのが、機械化の本当のあり方である。それには、少なくとも次の四段階をふむ必要があろう。

(1) 作業計画

① まず、グループ全体としての営農改善目標を明らかにする。たとえば、畑作と酪農とを兼ねているところでは、畑の飼料作物作付けを集約化して、えさの自給度を高め、乳牛の頭数をふやそうという場合もあろう。また、水田と果樹との複合経営のグループならば、水田作



共同利用で能率を上げる本土の先進農業従業者たちとその機械
愛知県岡崎市新堀町本郷　三浦文司さん外5人の共同



具志頭村字大屯　屋宜宣孝　同宣恭さんらも耕うん機の共同利用で生産をあげる

業の能率を上げ、浮いた労働力で果樹生産の質と量とを高めようという場合もあろう。要は、グループを構成する個々の経営がもつそれぞれの特殊性を無視せず、しかもグループ全体としての生産力が高められる方向をしっかり決めることである。

② この改善目標にしたがって、グループ全体の作物別作付面積や 家畜飼養頭羽数など 生産規模をはじき出す。それを一たん各戸ごとに分解し、今の作業方法を前提にして、旬別の所要労力表を作る。

③ 各戸ごとの所要労働力表を集計して、グループ全体としての労働の時期別繁閑の状態が一目でわかるように、旬別所要労力一覧表を作る。

④ この表を検討して、グループの手持ち労働力ではまかない切れない作業時期とそのときのおもな作業種類を見つけ出す。それが水田の耕耘、代かきである場合もあろうし、または甘蔗の収穫、植付けであることもあろう。

(2) 機械導入計画

⑤ 営農改善を妨げる作業を右のようにして見つけ出したら、これらの作業をどんな方法で能率化したらよいかを相談する。

⑥ それぞれの作業ごとに、能率化のために新しく入れようとする作業機の種 類、形 式、大きさなどを決める。このとき、グループの耕地の条件、作物や家畜の生産規模と栽培、飼育の方法を考え合わせる。また、すでに持っている機械の活用や改善利用なども忘れず検討を加える。

⑦ それらの作業機に、なるべく少数でしかも安い原動機を組合わせる方法を考える。

⑧ 新しく導入される機械は、例えば耕耘なり薬剤散布なりのように、ある一つの作業工程のなかで使われる場合が多いが、機械を選ぶときには、その工程のことばかりでなく、機械導入が作業体系全体にどんな影響があるかということも十分に考えなければならない。

農業では、耕耘、整地、播種、中耕、収穫など、それぞれ質の異なる作業が一連に行なわれた上で、はじめて生産物が得られる。このようないろいろの作業が栽培、飼育の段階に即して系列的に行なわれるとき、その組合わせを作業体系と呼んでいる。作業体系を組立てている各作業は工程（表1参照）と呼ばれるが、それらの工程はまたそれぞれに幾つかの部分作業（操作）から成り立っている。例えば、表1のように、水田の代かき一つをとってみても、多くの操作の組合せであり、しもそれかぞれの操作も幾つかの要素および単位動作から組立てられてゐる。だから新しい機械を取り入れて工程や操作を部分的に改めれば、その結果はつながり合う他の工程にも影響し、ひいては作業体系全体の変化さえも呼び起すことが多い。（つづく）（泉　裕己）

表1　作業の成り立ち

作業体系	工程	操作	要素
本田の稲作作業	耕起 代かき…… 植付け 中耕 除草 水管理 防除 刈取り 脱穀など	耕地の準備 用水の準備 機械の準備 機械の使用 …… 機械の清掃など	主クラッチを入れる 進行する 操行クラッチを切る 旋回するなど